

氏名	那須 雅子
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4190号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	From Individual to Collective: A Stylistic Analysis of Woolf's Developing Concept of Consciousness (個から集団へ: ウルフにおける意識観念の展開についての文体論的研究)
学位論文審査委員	主査・教授 西前 孝 教授 劔持 淑 准教授 栗林 裕 教育学研究科准教授 脇本 恭子

学位論文内容の要旨

序章: 作家の初期から晩年に至る主要な長編小説、代表的な短編、その他日記やエッセイなどの分析を通して、ウルフ文学の展開を文体論的・物語論的に再構成することの意義を宣言している。取り扱い対象の範囲、設定したテーマの批評史上の位置づけ、論文全体の構想・構成が述べられる。ウルフ文学の批評史および先行研究の成果を確認し、その上で、新たな観点からの読み直しの必要性を主張している。認知言語学やテキスト言語学の発展にともなって開発されてきている、より精緻なテキスト分析の手法を適用することの必要性、および、その期待される効果が述べられる。

第1章: ウルフ文学におけるモダニズム論の通説は一般に、初期の *The Voyage Out* (1915) にその萌芽を、そして *Jacob's Room* (1922) のにその展開を認めて、*Mrs Dalloway* (1925)、*To the Lighthouse* (1927)、および *The Waves* (1931) の3大著名作品に至って大きく開花したものと理解し、その後の *The Years* (1937) や *Between the Acts* (1940) は3大作品のヴァリエーションにすぎないもの、時には、単なる伝統的な手法への回帰として位置づけてきた。那須論文はこの通説に異を唱える形で新たな読みの可能性を指摘し、かつ、実証する必要性を強調している。1970年代以降のテキスト言語学や認知言語学、また文体論・物語論の精緻な手法を十二分に活用することで、特に *The Waves* 以降の作品理解に定説を超える新たな見解を提出する必要性を強調している。

第2章: ここでは *The Voyage Out* と *Jacob's Room* および手法の上で関連する4編の短編小説が分析されている。*The Voyage Out* については、伝統的な手法(全知の語り手など)を駆使した先輩作家(オースティンやG. エリオットなど)との比較によって、論者はウルフにおいて早くもこの初期の作品の中に、後に大きく展開するモダニズムあるいは内面リアリズム“internal realism”への関心を読み取っている。ウルフにおける実験的性格の始まりとされる *Jacob's Room* の新しさを、テキストの精密なナラティブ分析によって跡付けている。人間の内面の描出を実現する上で、全知の語り手による方法の限界の確認と、新たな方法の模索の始まりが宣言されている。

第3章: 上に触れた3大著名作品のうち *Mrs Dalloway* と *To the Lighthouse* の2作品の分析と評価が本章の課題である。*The Waves* をここで扱わない理由は、この論文の立論そのものと関係している。通説に異論を立てる那須論文は *The Waves* 以降に作者の認識上・手法上の更なる展開を主張するゆえのことである。前章に見た新しい叙述の手法はここに至って一つの頂点に達する。前2作品にあってはその主張に異論はなく、従来の説を確認することになるが、那須論文のここでの新しさは、そ

の見解を、あくまで物語論と文体分析、特に focalization と thought presentation modes の適用によって証明してみせるところにある。

第4章：論の柱の一つとして、Virginia Woolf の作品は1929年を境に個人から集団へと「意識」の概念に変化があった旨の主張がある。*The Voyage Out* から *To the Lighthouse* までの小説は個人の内面に焦点を当て、ある場面の個人の心（意識）をヴィヴィッドに描くことを目指しており、*To the Lighthouse* においてその技法は一応の完成を見たが、同時に、個人の意識を通して描く “internal realism” には限界もあったとする。*The Waves* 以降の *The Years* や *Between the Acts* では、C. ユングが提唱した集団的無意識の概念に通じる無意識世界が表現されるようになった事情が説明されている。そこで、*To the Lighthouse* と *The Waves* の間に発表された短編小説、1927年発表の “Moments of Being: Slater’s Pins Have No Points”、1929年に執筆された “The Lady in the Looking-Glass: A Reflection” と “The Fascination of the Pool” の3作品に注目し、作家の「意識」への関心が個人から集団へと変化していることを検証した。最初の “Moments of Being” は、文体論の観点から、ウルフの “internal realism” の実験の最後の作品であり、転換点になったと考える。後の二つは、物語論の観点から分析を行い、“one” の登場に注目する。“One” は、“the personal pronoun”、“generic personal pronoun”、“a person inside the story” の下位区分が示すように、それぞれ特有の指示対象をもって使用されることを確認し、この focalizer としての “one” の活用によって表現可能となった “the general inner world” を描き出している。

第5章：上述のように、人間存在へのウルフの関心は、「個人としての人間」から「集団としての人間」へと発展・展開している。心理学的には「個人の意識の世界」から「集団的無意識の世界」への展開に対応するものであった。ウルフ後期の3編の小説はその展開を実現するための手法上の模索を示している。ウルフはユングとは別に、殆ど同じ時代に殆ど同じ問題に直面していた事情が明らかにされている。先行研究とは一線を画す那須論文の主張は *The Waves* 以下 *The Years* および *Between the Acts* をこの文脈の中に位置づける場所に最大の論点が置かれている。そのためにも要請される物語叙述上の工夫は、特定されない叙述主体 *the mind*; dramatic soliloquies としての universal spirit および collective unconscious; empty centre、そして ‘Focalizer X’ といったナラティブ上のアイディアたちであったという。

結論：本論における論点を確認しつつ、残された課題とそれが本論文に対して持つ位置づけとについて、一定の見通しを提示して結びとしている。

引用文献目録：引用文献総数 ウルフの作品を含めて146点。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、20世紀前半に活躍したイギリス・モダニズムの小説家 Virginia Woolf (1882-1941 以下、ウルフ) の文体論的・物語論的研究である。全体は、序論に続く5つの章と結論、および引用文献目録からなる、英文によるA4版276ページの労作である。審査会は、論文の内容と形式を再確認しつつ、委員各位の専門的関心を中心にして種々質疑応答を行った。栗林委員は言語学（一般）の観点から、剣持委員は19世紀・20世紀イギリス文学研究の観点から、脇本委員は英語学と文体論の観点から、そして西前は論文全般にわたって細部を検討した。以下はその要点である。

ウルフの主要な作品を、叙述の手法の展開に応じて時代区分を設定し、意識世界・無意識世界の両面にわたる描写に見られる文体の変遷を跡付ける本研究は、ユングの「集合的無意識」(collective unconscious) との同質性を確認しつつ、完成作品はもとより原稿や関連の短編小説、さらに日記や評論における記述にまで及んで広範囲に調査している。また認知文体論の手法も取り込むなど、小説作法に深くコミットしたテキスト分析の実践を最大の特質としている。

審査の過程で幾つかの難点が指摘された。予備審査時の指摘以降も修正が徹底されるには至っていない問題点として、印刷上（タイピング）のエラー、語法上・文法上やや不注意な英文表現、専門用語の安易な適用、論理的展開を意識しすぎたための、いささか過剰な確認や繰り返しなど、今後対処

すべき若干の課題が指摘された。

とはいえ、問題の所在と発見、新たな分析によるその解決策の提言などが示しているように、本論文は今後のウルフ研究、特に文体論的・物語論的研究に、ひとつの新しい展開の道筋を開くことを十二分に予想させるものである。分析の手法としての Direct Speech (Thought), Free Indirect Thought (Speech), Psycho-narration, Narrated-perception, Internal Monologue, Focalizer *one*; Focalizer *X* などのテクニカル・タームを縦横に駆使することによって、ウルフ作品の中でこれらのアイディアが模索を繰り返しながらもテキストを縦横に織り成していく実態を、那須論文は肌理細かく解きほぐすことに成功している。その分析と論証は高い説得力を持つものであること、かつ、論の展開を支える英文は、若干のケアレスなエラーを別にすれば、研究者としての十分な表現力と説得力を持つものであるとの評価を得た。

以上の諸点を確認して、審査委員会は、委員全員の合意によって、那須雅子氏の論文を博士の学位にふさわしいものであるとの結論に達した。